

木 2  
5716



門 本 2  
5716  
卷

明治七年五月

小學讀本四

文部省

小學讀本四



例言

一 卷中を多く煩雜と除き要領を擧げて幼童の  
 誦み易うらむ事次要を  
 一 文辞を多くて雅俗と換はばよく語路のきつは  
 無きと主とをわは是まよ幼童の耳に入り易  
 くらしめむらたなり  
 一 編纂の次序の類を以て相從へて古今と内外  
 とを別たせしは擬貞女外擧ふべきこと今此



小學讀本卷四

凡例

一古今忠臣義士烈婦貞女枚擧をくわらる今此編の如きハ世々著しき者と聊記載するの意也

明治六年八月

小學讀本卷四

第一課

那珂通高 稻垣千穎

撰

賢愚の分る如く 天性之賦者何如

人の天性を至りて相近きものあると賢愚の遠く分るる所以ハ幼時より學ぶと學まざるを勉めんと勉めざるを勉めざるあり勉めざる學ぶ時ハ人々皆大人君子とあるべく又文人才子とも成る事を得べし然る天然の才智と稟けたる身より學ぶを勉めざる終ハ自不才無智の人とあるハ即所謂自暴自棄の謂て其天性を賦するものと云ふべし歎まべきの甚しむあはれや

小學讀本卷四

那珂通高

大人君子  
何如

第二課

古より大人君子と言をきく人ハたゞ至誠の心  
より忍耐の念と生ト或ハ職務を勉勵し或ハ學  
問と切磋して小事微物でも苟且よせざらざるより  
大業と成し得たるのなりされバ一の誠心百  
般の事と成し得可し若し誠心なき時ハ必諸事  
と苟且より一たび跌倒バ氣を喪ひ業を廢たさ  
ルに至る所謂九仞の功と一簣にわくものゝて積  
年の辛勞徒ごとく成らん人ハハ憐悞あるも痴  
鈍あるも有まど憐悞ありとて自怠るべからば

痴鈍ありとて自棄つべ  
如み業て痴  
ち得せも鈍  
何る成大不

痴鈍ありとて自棄つべ  
うらび馬ハ疾く走るも  
のあまるとも勉めざると  
ハ遠きに至ること能ハ  
び牛ハ歩の遅きものあ  
まども久しくしる怠ら  
ざる時ハ千里の遠きに  
も達ハべけまハ各至誠  
の心と以て忍耐の念と  
失を己ら志しとる所



とあさむことと要ひべし

○第三課

身の貧賤あるは却りて進達の助あり就中才藝  
 と琢磨せざるふは貧賤あらざれば志氣堅確あり  
 難し古より身と微賤より起りて顯貴不墜り或  
 は貧窶ふりて才藝と成り得ざる人枚擧む可  
 らぬされば艱難汝と玉ふはとも又人の徳慧術  
 智あるりの恒に疾疾不存むともいへり貧賤は  
 一時の勞ありて後來の榮と招く基ありは貧賤  
 と以て身の勉勵と廢むべりしむ

艱難  
 長進  
 何如  
 所以  
 以て

智と才  
 とを得  
 如何  
 如何

實際  
 験の殊  
 不益あ  
 何如  
 如何

○第四課

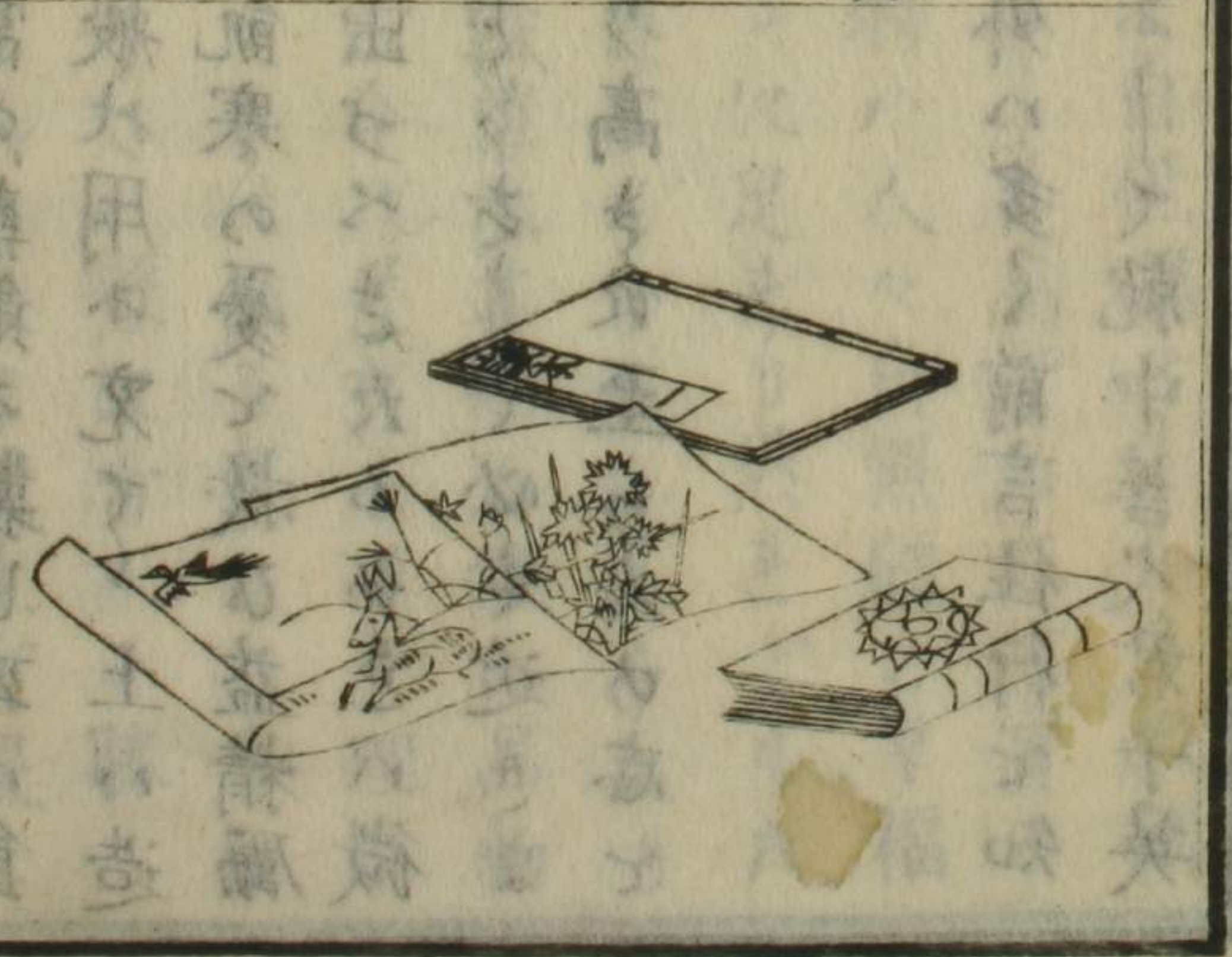
智の學びて得べく才の勉めて達をべし其學び  
 て智とえ勉めて才と達せんといはるに精力を  
 出して職事と務め家居平常ありて諸般の事に  
 當りて親しく實際經驗せざるは過ぎたるものあ  
 る事あり人々日用行事の上又就くくく注  
 意し身と修め已不克つこと以て力を用ひる時  
 往くとして學あらざることもあり事として教  
 らざること無しされば外國の人も自勞して得  
 る處に讀書に得たるものより多く自事を行

書と讀  
めども  
編綴益  
の者と  
を所  
以何如

ひて得る處の學習不て得るものより委しく  
親しく人品を觀て得る處の古人の史傳よく得  
たるものより切ありこと何とあるは實際經驗  
たるの其意を用ひること誠なきは也といふり  
實に此處ふ力を用ひる時の誰までも實學の要  
と得る當然の職務と盡し事理不達なる事容易  
にしく彼書冊より學び得る處の者も不宵癡の  
差あることあるは受業の幼童のまじり此處不著  
目たるは然らざれば日ふ千卷の書と讀み萬言  
の語と誦せども所謂蛙鳴蟬噪に均しく又

鳥獸草  
木等  
至るま  
で知ら  
る可  
らざる  
如所  
以何

何の益あらんや  
○第五課  
人の才智と長むるの實  
學ふものありのありきと  
も其次の書ふ就き人ふ  
ゆりて天下にあはゆる  
鳥獸蟲魚草木金石等の  
類も其名を知り又其  
性も用ひて知るべしと  
て後に之と平居日用の



鳥獸草

四

大

器械不施之と人生必需の薬餌不製し或は食  
に供し或は衣服并に諸般に用不充てし上は造  
化の功と助け下は人生飢寒の憂と救ひ益精勵  
して未發の用とも考へ出づべきためあまは微  
物と捨てば小物とあるとぞして必を近きよ  
そ遠きに及ぶし卑きより高きに至らんめ志と  
立つ可し

○第六課

實學と務め萬物と知る外は多く前言往行と知  
るも亦才智と長き道不して就中善人君子英

前言往  
訓の如  
何に以

雄豪傑の言行の人として自砥礪せしむる教訓  
とありりのふく裨益最多し其高潔の志信實の  
行と觀く私に淑くある時人々自無疆の幸福  
と得不朽の名聲と立つるに足まり然まどもた  
ざに古人の言行の如く尊びて今人の及ぶるも  
のと自畫るべからば鳥獸草木其他百般の品物  
古小異らぬと特人の古今に差有る可き理を  
しと勉むると勉めざるに依る事あり今の  
人と雖も勉強の功不由りて懸に古人不勝る  
事もいらでり成し得ざらん古人も後生可畏と

神武天皇

云ひまゝと故きを温ねて新しきを知らずとも云へ  
てたゞに古きを温ぬるのみならず無用の事也  
新しきをも知りてこれ人の師ともある可けき  
此篇を讀む者りの藍より出でる藍よりも青  
しと云へるが如く古人の言行を見て古人より  
も一層勝りたる言行あらむやう勉めむべしある  
べりとす

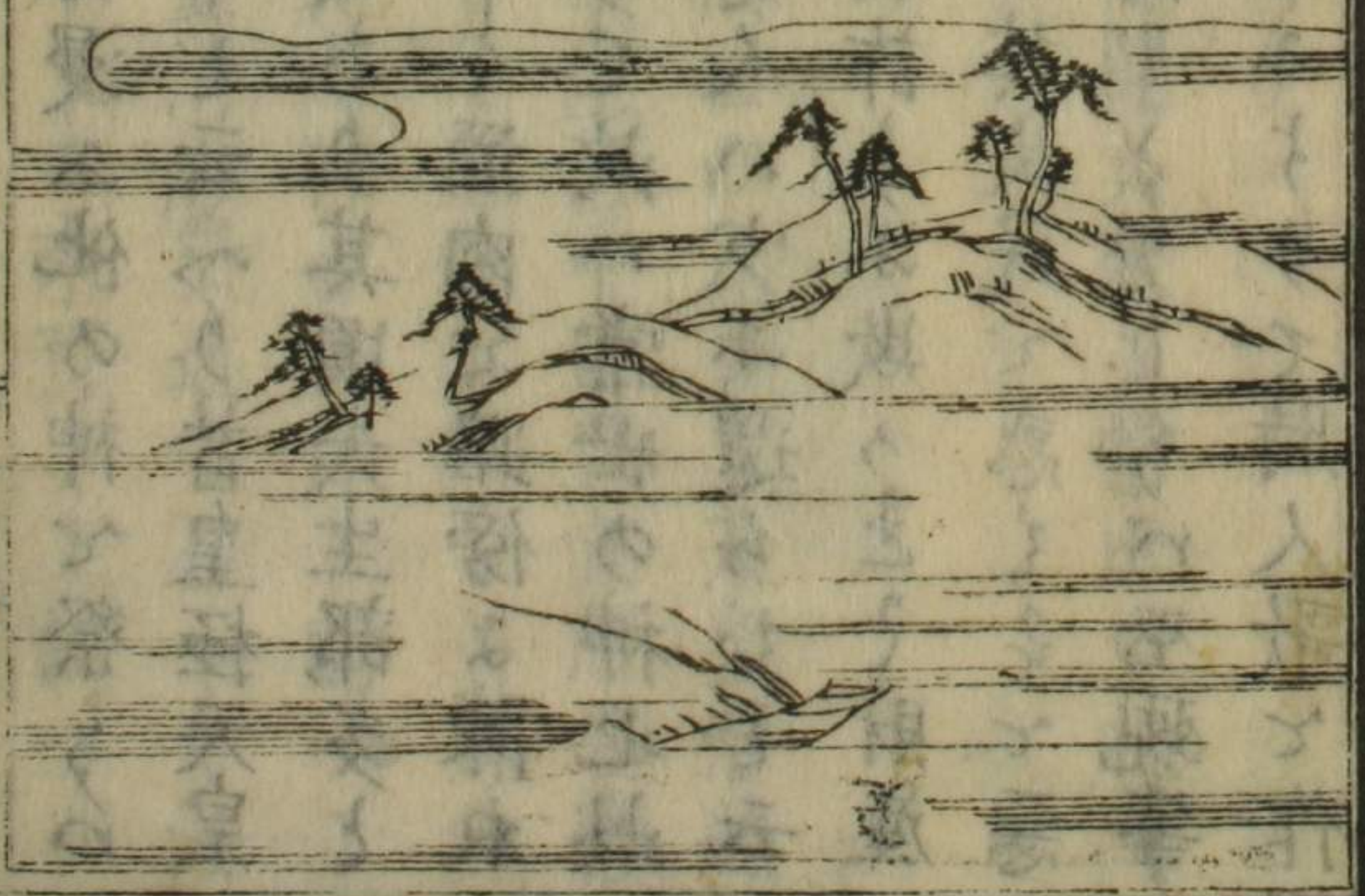
○第七課

神武天皇既ふ中洲を平け大和の畝傍の橿原に  
宮ふして御位ふ即き賜ひてより四年詔ありて

神武天皇の靈天  
の時賜ふ立  
て賜ふ何  
如

我が皇祖の靈遠く天よ  
り照臨して朕が躬を助  
け玉へるにより諸の虜  
ども易く平きて天下に  
憂あり朕の天神の御子  
のまゝ今天神を祀りて  
大孝と申ふ可しとて即  
靈時と鳥見山に立て賜  
へる

○第八課





淫祀といふ  
何如

己が齋くべき神をかきて漫ふ他の神を祭るの  
淫祀あり淫祀ふい福無しと云へり昔皇極天皇  
の御世は秦河勝と云ふ人あり其頃大生部多と  
云ふ者巫覡として事々しく酒肉と路傍に陳ね  
蠶糸似たる蟲を祭らしめて此の常世の神也此  
を祭らば貧人の富を得老人の少小還らむと云  
をせしむるによりて人々其詐り不欺りまじく財産  
を傾けて祭るると河勝其良民と惑をまて惡  
みて多々身と痛く捶ち懲らしむるに似たり  
皆畏まると其事を止めたるふよりて時人歌と作

りて河勝が勇斷と認めたり  
うのまじの神とも神と聞え來る常世の神と  
打ちきたすのも

第九課

和氣清麿の稱徳天皇の御世の人あり天皇僧道  
鏡と寵に賜ひしゆゑ太宰主神中臣習宜阿曾麿  
とりし者諂ひて道鏡として皇位に即らしめ  
天下必太平あらむと八幡太神の託宣に賜へり  
よし矯り奏しけり天皇清麿を近く召して汝  
疾く筑紫に往き神勅を承りて來可しと詔へり

清磨復  
奏の  
何如  
話

道鏡もまゝ清磨に向ひて大神の使と乞ひ玉へ  
るん我と皇位不即けむとの託宣也汝宇佐不往  
きて神教と承りて我が望の如くせば汝と以て  
太政大臣と爲むり我が意不違の重科不處  
まべと云ふ清磨宇佐より還りて我が國家開  
闢以來君臣の分定まり臣と以て君とたふ事い  
まごこれ有らむ天都日嗣ハ必皇胤と立ち無  
道の人ハ早く除くべと神勅ありよし奏し  
られ道鏡大に怒りて清磨の官と奪ひて大隅  
國小流とて翌年光仁天皇御即位有りて道鏡

阿曾磨  
の  
事  
は  
此  
の  
由  
也

との命討といけて下  
野國の薬師寺と造る  
別當にせらむ阿曾磨  
とて大隅國の嶋守に  
賑中清磨とて大隅國  
より召し上せし本位  
と授け賜ひ後卒して  
正三位と贈らむとて  
いま西京の高尾山に  
祭まむ護王明神とい



小學讀本卷四

大隅國

此清磨のことあり君不事ありりのはうくあま  
まらしくこぢ

○第十課

西京ある北野の社ハ贈正一位太政大臣菅原道  
真公を祭まゝる所なり公正三位右大臣みく昌  
泰三年九月十日大内の宴不侍りて

大鏡ハ重陽とあり

君富春秋臣漸老 恩無涯岸報猶遲 とい

ふ詩と作りて仙洞御所不奉まてけきべ敬感の  
餘に御衣と賜ひたると翌年四月本院大臣時平  
公の讒ふよりて俄に太宰権帥に左遷せらるるこ

菅公の  
太宰に  
遷りて  
定まら  
ざるに  
以て  
年月  
如何

とど猶君と念ふ情厚く  
して彼御衣と朝夕身よ  
離さぬ副へらるるり同  
年九月昔日の事と思ふ  
一出て懐舊の情不堪  
へび  
去年今夜待清涼秋思  
詩篇獨斷腸恩賜御衣  
猶在此棒持日日拜餘  
香



と詠一賜へて凡べく忠臣義士の節操ハ變らざる  
時ハ至るて著る讒に遇ひて遠所ハ謫せらるる  
グらあるや君を慕ふ心の深きハ萬世忠臣の鑑と  
いハ可きなり

○第十一課

事に臨みくハ難て辭せざ身て殺して節を全く  
するハ臣の義あり元弘三年村上彦四郎義光ハ  
其子義隆と共に護良親王ハ從ひ吉野の城に籠  
てたると東國の賊軍四方より攻め圍みくはけ  
るハ賊兵多く討死し宮も今と限りと思し召し

義光の親王と奉り  
護良親王と奉り  
王と奉り  
如計い何

て親ら短兵ふて切廻りたると是時義光ハ追  
手此木戸に戦ひける敵の箭十六筋を鎧に折  
かけて勇氣撓まら宮の御前ハ畏まりて賊勢益  
盛に候へば宮ハ一方を撃ち敗ると落ちてさせた  
まへ但御跡ハ止りて戦ふ者無くハ敵兵君の御  
後と追ひ參らせむ恐むあとも御召の錦の直  
垂と御物の具とを賜ちりて御名を冒し奉り暫  
し賊と欺き候をんとて御鎧の上帯解き奉るハ  
宮ハいりみりねて涙あぐら落ちさせたまふり  
子の義隆ハ今年十八歳なると父の自殺せむ時

義隆の  
其子の  
誨べし  
言何如

同トく腹切らんとして  
をせ來りけりて義  
光止めく父子の情の  
さる事なまとも徒お  
死せむよりの宮の御  
行方見もて參らせむ  
に一やどと辭と盡し  
て誨へけし義隆力  
あく宮の御供せり義  
光櫓に上り遙く宮を



義隆の  
討死の  
志  
何如

見送り奉りて思ひ定めし如く腹をき切りて  
仆せりて賊軍をきと見て宮の御自害なり我  
先小御首賜をらむと圍を解きて集り來り其間  
に宮ハ引違へて落させ賜ふと吉野執行の兵五  
百騎討ち道と遮り奉り今ハ追まできせ賜  
ふべくも見えざりける故義隆一人踏ま止まり  
て半時計支へけしども其身十餘所の創を蒙り  
ぬいまハ宮も遠く落のびたまひぬらん賊の手  
よりまきて死あんによりのとて一叢竹の中お走  
せ入りて腹をき切りて失せり此間ハ宮ハ虎

口と脱ぐきて高野山に落ちさせ玉へり義光父子の忠死いひたつるもあらく愚ありと謂ふべし

第十二課

延元の亂に瓜生保其弟義鑑源琳重照等兄弟五人共に脇屋義治と奉じて主將として越前の國杣山の城に據りて在りけるが敵將高師泰と戦ひて保義鑑等死ししうは源琳重照等散卒と收めて再杣山に還りたるは城中の士卒残まらぬのいくなくもあけまは皆力あけに見えし

保の母  
義治と  
勸むと  
如き何

と保等の母聊も憂ふる色あつくして義治の前は杯を持出で云へらく妾が兒等不肖やして此度の戦も敗と取も君の心と傷まゝあたり然まども幸に二子死ししとい少く罪と謝するに足まの兒等いとよりの君の爲は事を舉げたる



へい意の如く賊と平げたらんもの千百  
の子と失ふとも妾に於て更は悔ゆる所あり今  
三子猶存してあまは再事と擧ぐるに足むりこ  
と妾が哀と轉じて喜とある所也とて酒と勧め  
たりり色は是と見るもの感激せざるは無り  
しとて婦女子の性として何事も一たび敗る  
時の其氣忽沮して志と喪ふ者あるに此人寡婦  
の身として忠義の志厚く愛子二人と失ひても  
再擧と謀るて聊も屈せむ義治が將と挫んと  
る英氣と勧め起して其忍耐の強き男子も耻

つる所あらばや

第十三課

職あらんりの誰も其勤と怠るまじき事あり  
ども特は粟田左大臣の如くならまわること  
左大臣の名と在衛といひきして才學の勝れた  
るもの非ざれども恪勤よにまきりたる人  
内へ参ることとに車は文書と入る見つゝ行々  
ゆくりなれば帝の問を賜ふ程の事い必明に  
御答申さるゆゑ帝も深くことと感したまふ  
と或は雨風烈しき日小大内の人々流石の在衛

在衛公  
の御答  
小滞ら  
さる所  
以何如  
在衛公  
奉内小  
怠りか  
如事何

祖父の事  
の如く  
何事

も今日のよも参らトあど云ひあへるその詞も  
いまど終らざるも在衡養と着深沓とをきくと参  
りたりと色べ皆人感トあくりけるとを是もて  
も朝暮の参内怠りあくりとを見るべきなり

○第十四課

元正天皇の御世は漆部司令史丈部石勝と云ふ  
者あり其長男の祖父磨とて年十二次ぎの安頭  
磨とて年九三男の乙磨とて年七也石勝己が司  
る所の漆と盗みたる事露とて流罪ふ定めらる  
たりト三人の子供ら官不出と申しけるハ

父石勝りより貧しく  
木々生活たのむ處みき  
まより巴等と養をむが  
為にかのけなくも思ひ  
よりてりくる罪と犯  
たるべわれバ今其科は  
よりて配流せらむ事  
ハ國家の大法故せむ方  
無く待まど其まゝに見  
過を不恐びむとて参出





祖父等  
父の願  
磨の願  
聴の願  
玉の願  
何の願  
如以何

てより已等三人官の奴とありて父の罪を贖ひ  
奉るべしといひて父の配流を赦し玉へと願ひ出  
てたりけむば天皇勅し玉ひて人二百行ありと  
も孝を以て先とし今祖父磨等身奴と為るは父  
の罪を贖ちむと欲を誠は慙むに堪へたり法一  
人のためお枉くべきに非ざるも其願を聴む  
可しとて石勝の罪をば赦させ賜へし

○第十五課

兼和の頃山田古嗣とて阿波介とありて其績世  
は聞えたる人あり幼き時母を喪ひて父獨り

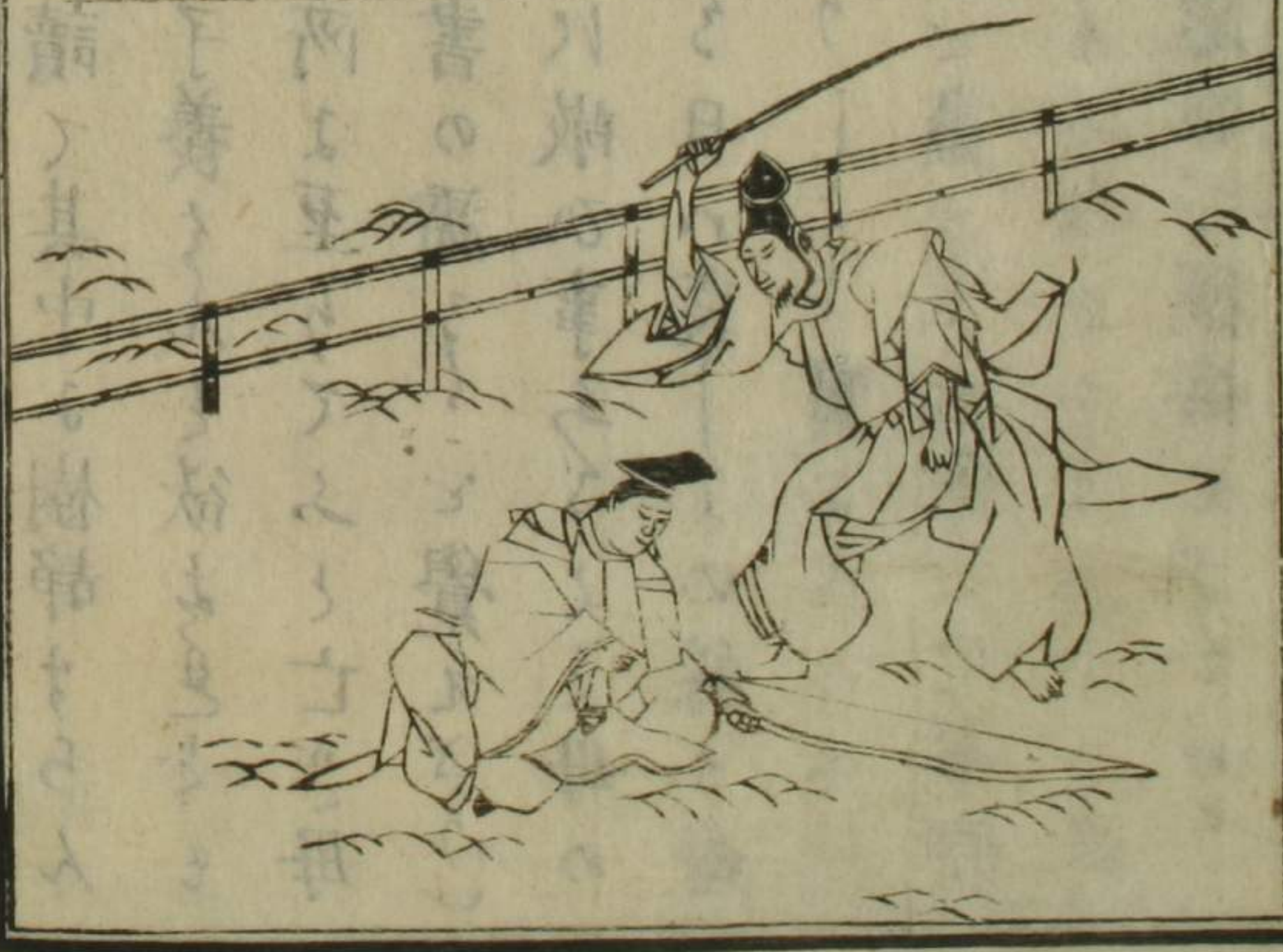
古嗣  
處の  
見  
書と  
濡  
如以何

てしある日韓詩外傳を讀て其中に樹静すらん  
と欲をせとも風止まむ子養をんと欲をせとも  
親待するといふ語ある所に至りてふと亡き母  
と思ひ出て涕を流して書の濡るゝと覺えざりし  
とぞめたる人ゆゑ從母に敬ひ事あること母の  
如くありて父の喪せざる日ハ哀しみの餘り瘦  
衰へざるさぬ常は異ありしより實は人の生ハ  
限りあるもの故我が養を盡さざる内は父母共  
に死んおへ其時悔ゆともひみりたるべしされ  
の幼少より善く此語を思ひて後悔せざるやう

怠り無く孝行と盡し  
子とるものみ道よこ

○第十六課

舎人下野公助ハ敦行の  
子ホーテ射術の達者  
るガ或日右近の馬場  
て賭弓有アハ三の的  
皆射損トアリ敦行常  
ハ極めて子と愛まら者  
あはども是と見く沓も



公助の  
逃げた  
れど  
何れ  
如所  
以

おきあぐぞ馬止の方  
公助と打つ敦行ハ八十餘の老人まで公助ハ若  
く壯あるみ逃げむともせぬ一々二十計打とれ  
たり人々いぢで逃げもせぬ一々かくハ打とる  
とるぞと問ふに公助父の年八十に餘りこれバ  
若腹立ちと上は逃ると追もど躑き休とのや  
せむと思ひて打ち伏せら逃たるありと答へけ  
とバ人々涙で流して感むるをく父母老衰  
せば殊は坐作行歩の間小心と用めて顛躓の患  
とらんりみるあと公助が如くまら

伯瑜  
泣く  
何如  
所の

○第十七課

支那韓伯瑜と云ふ人母不答うと云ふ事ある事  
も常より泣きたりと或時過ち有りて其母答  
うつ不泣きたり母怪みく其故と問へば是遠う  
たる度ごとと身は痛りりとの此のさびの  
いづのちぬハ母の年老いて力おとろへ賜へる  
故ありと思ひ已と心弱くありて泣くありと云  
へども

○第十八課

元祿の頃陸奥國大沼郡間田莊高田村と云ふ所

利三郎  
兄弟の  
病の  
救ふ  
情何如

利三郎吉十郎とて兄弟の孝子あり萬の事父  
の言ふに従ひて少くも己が私と交へば父餅と  
好み々色バ兄弟常は朝疾く起き出でく餅賣る  
家より行き買ひ調へ懐中にしつて走せ歸り是其  
暖あると進めむが為也朝夕の食も父食せざれ  
ば食を食する時ハ父の口もと守りて快く  
食せしむ喜ぶ事限りて或年父痼病を患ひしる  
に種々醫療を盡せども更な驗を醫師ハ老病  
なく藥力及び難し此上の食物の禁忌も無用也  
何れも欲するは任せよといへるに家内の者

共も然る事と思へると  
兄弟之より従ふを妻子に  
言ひ合せて嚴しく食物  
と撰び父の心に背りぬ  
やう調へ進め何事おも  
心と盡しつゝ其病遂  
に癒えざる醫のち捨  
てたるよ任せむして兄  
弟の心と盡しつゝ事誠  
に殊勝ありされば領主



より米若干と賜ひて其孝行と賞せしむるにたり

第十九課

正保の頃京都二條室町の富商は布衣屋與左衛  
門と云ふ者あり若き時より酒と好むと父母度  
々禁ぜしむるとも嘗て聞かば身の行不善の事と  
も多うりしが年五十ふ垂かとりて始め孝道  
の重き事と知りて前非と悔い其より身と慎み  
酒の心事と止め酒器の類凡そ手もと取ら  
ば後父病は臥しつゝに與左衛門晝夜側と離し  
て孝養至らぬ事無うりしと身老い病葉のり

興左衛門  
行心  
改む  
事何如

與左衛門後不  
大過を  
未き  
何如  
以

しうの三年を経て終に歿しぬ與左衛門哀む事  
限なく家事と盡し妻子不託し自一間に籠て居て  
母に見ゆるより外の其處と出づる事ありさう  
十月をのり經て母まゝと死したり後數年を経て  
京を去り黒谷の麓に移り住して農事と業とせ  
る年六十を餘りても猶父母と慕ふ心深く常  
同志の友に謂へらく我他念ありなき此身の父  
母の遺体あきば何につけても身と汚し辱め  
と勤むるのよし也さる故に今の大あはれ過ありし  
世より放蕩ありて父母は養てりへるみむ晚年

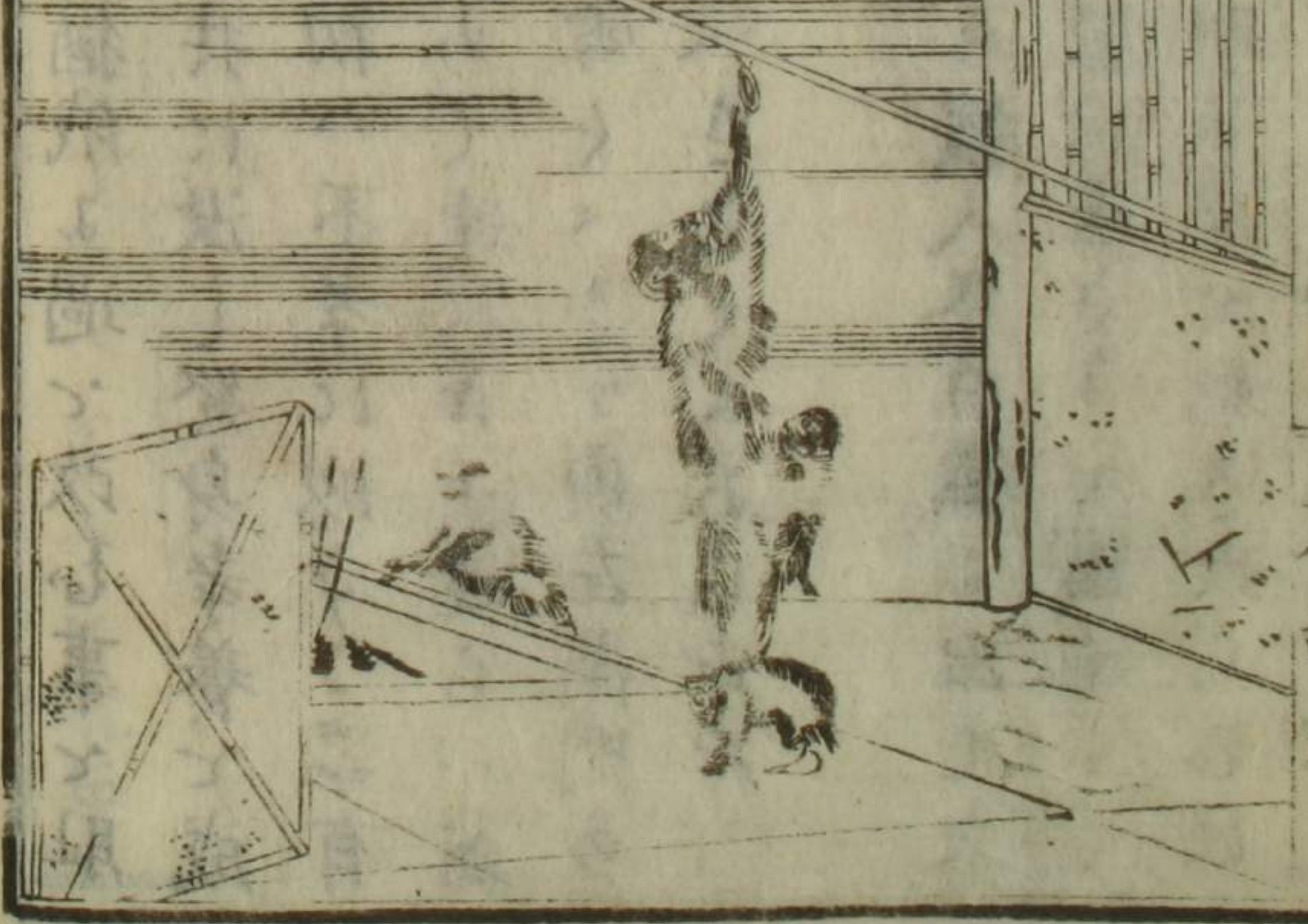
よ至りて少心づきても猶俄に過て改む事と耻  
てとらぐむる間も父母共に没し終身孝養と成  
し得ざる徒もあるよし初に不孝に似たる事有  
りとも非と悔い過て改めて速に善小遷らば前  
罪と贖ひ不孝の名とも雪ぐべきと與左衛門の  
如き者少あきハ惜しむべきことよあらむや

○第二十課

信濃國伊奈郡入野谷村の獵人冬日獵に出でた  
るに大木の上は大あはれ猿は居ると鐵炮を  
打とりて夜家に歸りて明日皮を剥き取らむに

猿の親  
其の心  
暖むる  
何れか

冷え凍りて不便あら  
むとて爐の上懸け置  
きたりし深更に至り  
て子猿ら多く來りて其  
親猿の腋に取附きて  
代る下りて下  
の爐より手と炙りて其  
疵を暖めたり子の親と  
思ふ事獸類と雖もかく  
の空しくふし孝心か



きの獸も及むぬりのとりつべし耻ぢざる可  
けむや

第二十一課

支那春秋の時孔子の弟子に関損と云ふ人あり  
實は母の既死して父後妻を娶り二人の子を  
生り損孝養闕くる事無けども繼母其之を  
疾みく冬の寒き人も已が生みく子も暖ま  
着せ損るの蘆の穂絮を衣服に入して着せむ  
どせり或寒き日父他へ行くと小車に乗りて損  
馬と御ちせしに損寒きに堪へずねて鞆の綱

父の  
後妻の  
の  
惡し  
きを  
何れ  
か  
以て  
知

と取を落せり父は責め  
 らる也ど手凍えて覺え  
 ざりおよりてなり父の  
 此よりて初て後妻の惡  
 一き事と察し逐ひ出さ  
 むと一々々に損泣きて  
 父を諫むるや母のま  
 を時ひ只我一人のい  
 凍えもまをけど二人  
 の弟は暖かならんさる

父の損を諫むる如し



と母去り玉ちり三人共小皆養育する者無りら  
 むと止めりりば父逐ふ事と止め母もまを其よ  
 を悔ひく慈愛の母と成り三子と均しく養ひた  
 りされば父母縦ひ子と愛する心なくとも子こ  
 ろりの誠心と盡して怠りなくば父母も亦終小  
 其心と和らぐべりりあたまをも其子と惡ミ  
 て心の改まるざり子の誠心の至らざる故と  
 思ひく怨み怒ることありるづ

○第二十二課

まを其よかろい姑くかりんまをく身小くく

如<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ブ  
事<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>ラ  
何<sub>レ</sub>セ<sub>レ</sub>ク

子と思ふハ父母の情也  
西洋の或國はブラックと  
云ふ婦人あり吹雪烈し  
き日ハ稚子と腋に抱き  
て他より家へ歸らむと  
せしが凍死て路傍に僵  
せり稚子ハ泣き叫び  
ていぢむ方なくあぢぢ  
な色ハ母ハ息も絶々を  
下より己が衣を脱ぎ



て稚子も着せ暖めて救ひ得り  
る者多きは依りて終に死  
と助けむとて着たる衣服  
も至りて色と見ば人の子  
なば有る可からざる  
○第二十三課  
楠正行ハ正成朝臣の子あり  
延元元年足利尊氏  
西國の兵と率みく都に入ら  
むとせしうば詔  
て正成朝臣と新田義貞朝臣  
と攝津國に遣  
てを封じむ此時正成朝臣  
櫻井驛不至り思



如く言何

ふやう有るもて正行と召し懇に誠めて曰はく  
吾聞く獅子の子と産みく二日にしてこそと千  
仞の壑中よ擠して其力を試みると今汝年まで  
に十歳よ超えり心有らばよく吾ら一言と記  
せよ此度の戦實に天下安危れ分る所ありは  
我まと生きて再汝と見るつうらば我亦みは天  
下へ終に尊氏の掌握小歸をべし其時に當りて  
汝苟くも身と保ち家と安ぜむが身も我ら  
多年の忠烈と顧みお降を朝敵小乞ひ未練の働  
とて笑と衆よ取る事ありは一族徒黨の者一

人ありとも生き残りて  
あはれ限の金剛山の城  
に籠りて再義旗と擧ぐ  
べし汝の孝行とよに過  
さざり事ありとて河内  
へ返し遣せり正成  
果して湊川の戦は死し  
たりゆきば尊氏其忠節  
と感して首と河内小遺  
とるに正行のと見て悲



小説子貴木卷四

十三

文部省

正行自  
殺せんと  
事何如  
母の正  
行と  
言ふ  
何如

にさへむ直に別室に走る行くと母怪みく窺へ  
へ父のうらみは止めざる刀と手お抜き持ちて  
自殺せむと構へり母驚きて走りより正行  
の小腕よりつきを涙と流して誠へけり汝  
幼くとも父の子ありべかちりりの理は迷ふ可  
うらむ能々事のみと思ひて見よ父の汝を櫻  
井よりかへ賜へり汝の幼しき死につく  
と哀みてはも非む又汝不無きありとふらひ  
せむ爲はも非む君のありしきひ限ハ残黨と  
集めて再勤王の兵と起せとあり汝まのあり

正行の  
遊戯  
事何  
蓋の  
二

遺言と義を還りて吾小告けたる其辞今か身  
ま在りと汝ハ俄に忘れたるやかくてハ君の御  
用お立ち参られへしとも覺えをとりて刀を奪ひ  
取るたりり也バ正行大に感悟しそそれより後  
ハ遊戯をるおも常小軍陣のかけちと設けて是  
ハ尊氏と追ふ也是ハ朝敵と討つ也おど云ひく  
聊の事又至るまで此事をのり業として暫くも  
父の志と繼るむ事と忘れを長どるに及ひて細  
川山名等の賊と討ち高師直師泰の兵と敗る終  
又弟正時と共に戦死せり正行始め父の遺訓と

孟母二  
の次  
何如

受くと雖も至孝の餘りに其の死を坐視せざるに  
忍びを以て自殺せむとす。若此時其母の止  
む事なくば鸞鳳の卵を碎くも齊しく無二の  
忠臣と空しく失ふべき父母の誠によりて忍耐  
の念を起し忠孝兩全の子と成り上の宸襟を慰  
め奉る下は乃父の志を継ぎたるは父の訓に有  
まらざるも又此母の力により

○第二十四課

孟軻は支那戦國の代の人にて幼き時其家墓處  
に近かりし故に軻常に墓間の事のこととして遊

孟母の  
軻の言  
何如

びけむる其母心づきて此處の子を育つべき處  
小非むるを市の傍に遷りたり軻まこと是より商  
賈の物と賣買する状として遊つり母まこと此處  
も子と育つべき處は非むと思ひて學校此側へ  
遷りたるに軻乃俎豆を陳ね禮容を習ふて以て  
遊とせしむる此處を子と育つべき處ありと  
て遂に其處に居たり後軻長じて他所に學問  
せしにみず未熟ならず家に歸ると折節母の機  
を織りりけてありたり軻は向ひて汝の半途  
ふしを學問を廢せしむる我が此織を断つら如し

と言ひて其機を断ち切  
りて終に軻實より恐  
まてまゝと學問に志と厚  
くして終に曠世の大儒  
と成せり軻の母の如き  
ハ婦女子中より能く子  
を教へりてのめといふ  
べきあり

第二十五課

英吉利にヒールと云ふ



父の如  
ル如  
教小  
事何

者あり童子たり一時其父口に  
し久ひて覺へ得らる程何  
もて少しづつ說話する事  
を習をせまると安息日の説法  
をも記憶せらる程づつ暗誦  
せさせりてをドめの程に進  
みりとも少りてりど覺ゆる  
にあかひ漸や小増し年長  
くるに從ひ其心を用わする  
に慣せし記憶の力漸く強く  
成り後より聞ゆるの説法を  
暗誦せざり事あるて終に  
議院の辯論家の魁首と  
なり元來此ヒールハ中等  
の材質あるより強く記  
しりて善く事を論ずる程  
ありてりハ幼時

より其父の善く工夫と用ぬく慣習せしめしに  
よきてあり人の賢とあり愚となすも多くの其  
子の天然の生質小のあらで其父母此教の善惡  
よりよきと天下の父母たるものよき此小注意を  
べき事なり

○第二十六課

恩と受けての必報せむ事を心づくべし中おも  
主恩の殊小重し伊東九郎祐清の父と祐親と云  
ふ平氏譜第の士小て世伊豆に住り源頼朝平  
氏の爲小流されて其國不在にける時祐親事よ

よりてくことと害せむとせしに祐清小其謀を  
告げて避けしより後頼朝兵と擧げて鎌倉に  
據り坂東の將士悉屬する及で祐親を虜小し  
至る祐親恥て自殺に頼朝祐清を召て曰く汝が  
父の罪あるをわすれ吾猶ことと宥めんとせり況や  
汝此吾小恩あるをや汝吾小屬せよと言ふ祐清  
辭して吾の罪人の子などい死固より其分也吾  
ら嚮小志と君小通せし他日の報と望まむと  
よへ非とべ今將何の面目ありてり君小事へむ  
唯速に死と賜ふべしと言へとも頼朝猶ことと

祐清の  
語録  
如何

祐清の  
戦死の  
名何

殺すに忍びを祐清又君も一吾と殺さるゝの吾必  
平氏の爲小君と射んといふ小頼朝一人の去  
就何ぞ勝敗は數は與らん平氏は従ふことハ意  
よ任せよとて放遣しけむバ祐清京小往て平惟  
盛小従ひ源義仲と越前國は拒て遂小篠原に戰  
死せり

○第二十七課

小宮山友信と云りのハ武田勝頼の家士なり或  
時其朋輩と事と争ひく勝頼に訟るゝは勝頼暗  
劣よしとて士卒と使ふ方と知らぬ讒者の言に

たをひく友信と非理は落しとくハ退けらせり  
家に籠居せりかくて天正十年織田家の軍兵甲  
斐と攻め入りりる時主従纔に四十二人小て天  
目山に落ち往きたるは友信其跡を慕ひ途小く  
馳のきたる小先に己と争ひとる者又己と讒し  
たる者皆既に逃げ去りて一人も止むる者あり  
りり色バ友信慷慨不堪へは傍の人小向ひて主  
され又讒と信ト我と棄て、用かたまを然る  
と今我其難は従ひて死なば主の不明と人又顯  
ひ不似たりたりとて其難と坐視して死と致こ

友信の  
節義の  
如何か

さる時ハ主従の義を害ふべし縦主の明を損を  
とも其義をハをこゝろふべしなりとて四十二人  
と共小國難に殉ひたり人の従者たる者ハ縦ひ  
其主に非理ありとも之を以て俄も其恩を忘る  
べしなり友信の如きりのハ誠に節義の士と謂  
べし

○第二十八課

世ハ舊恩を忘るゝ其主の事あるは臨みて忍  
ち避け遁るゝ者も多きに江戸銀坐の街ハ住せ  
し平野喜四郎の家僕彌兵衛と云りぬ主の事

彌兵衛  
其主人  
はあま  
んとい  
て辛苦  
情何如

一ハさよと於實小珍し  
乃是主の喜四郎の召  
仕の惡事に由りて伊豆  
國三宅島に配流せらる  
るに彌兵衛別々悲み  
ていりて今一度主人に  
逢ふ心と志と碎き案じ  
つぎて船漕ぎ事と習練  
し其時の海賊方小笠原  
彦太夫と云ふ者此組の



小學讀本卷四

二十九

友信

水手と成り三宅島の船便と持ち得て辛く渡  
島一本意の如く年来用意せし物とも若干と遺  
りて後喜四郎赦ふあひて歸府しける時も彌  
兵衛有る限の財を以て主人の資用と助け供給  
甚懇切なりしとぞいやしき身も主と思ふ情  
深きめのいづく恩も背りぬ行のあつら出  
來りりのなり

○第二十九課

大坂葉山町の鍛冶八兵衛が妻重病なく死なむ  
としける時其家は久しく飼へる猫ありて暫く

八兵衛  
家の  
猫の  
死の  
事何  
如

も床邊と離れぬある日病人猫に向ひて我の頼  
て死なむ我が無き跡をて我が如く汝を愛  
せし人有らざるべけき今より何方へありと  
も行きを愛せらばよと云ひしが病人死し後  
彼猫葬と送りて行きたるを追ひ返しけむ家  
より送りて自舌を齧み切ると死し畜類と  
雖も心有るはかくめ如し人たる者主恩を顧み  
べし可あらむや

○第三十課

袈裟の源渡の妻なり其頃遠藤盛遠と云ふ士あ



袈裟の  
衣川の  
答ふ  
言何  
如

アけつがあさ日他へ往く路おろすもつらげも袈  
裟と見し小忽戀慕の心起りてやまむ袈裟の母  
の衣川といひて盛遠の叔母なりけり其家よ  
至り劫して袈裟と得むとせり衣川驚き怖きて  
汝我と釋さば今夕必汝と袈裟に逢せむと約  
して盛遠と返して袈裟と召びて委に盛遠の  
意とのべ且一小刀を授けてまじ盛遠が言と聽  
りむ彼必我と殺さむ今彼の手は死あんより  
の寧汝の手は死あむ汝亟小我と殺せといつば  
袈裟悲ま堪へどして子の親に代りて死せむい

袈裟の  
盛遠の  
給言  
何如

固より其分みせば兒よ  
く計をむ必憂ひ賜ふ  
と言へそ日暮ま及び  
盛遠來りてはは袈裟給  
きて夫あらん内小他人  
に従ふの後ろめむ業  
あまの今夜渡に髪沐  
せて酔ひ臥さむむし  
君潛り寝所入り髪と  
探りて殺しけむと云



小書賣本巻四

三十一 文部

袈裟  
夫の  
死を  
情何  
如し

ひて家より歸りて渡に酒を勧めてふさせ置き自吾  
が髪を解き洗ひ夫の服をきて卧しつゝ威遠夜  
半より入り來て丸やをく首を斬り持ち出でしよ  
く見ると案は違ひく袈裟ありは此が大不悲み  
直小僧と成まり是即文覺なり袈裟一女子を以  
て其身を殺し親の難を救ひ夫は命も代りし  
其孝行貞操世に倫ひあるものといふべし

○第三十一課

雍氏  
夫の  
死を  
事何  
如し

恭宗の時池州の守趙昂發の妻に雍氏と云ふも  
のあり元兵池州を攻む事嚴しきゆゑ城兵降  
る者多かりしに昂發防禦至らざる所無けし  
今ハ術竭きて事の濟成可うらざることを知  
酒を設けて親族朋友に訣別し且雍氏に向ひて  
城を破れむと然しと吾ハ守臣たるは  
理も於て去る可うらむ汝ハ先出きて走る難を  
免るべしと言ふに雍氏君ハ宋の忠臣と爲りて  
我獨忠臣の妻たる事能はざるむやとを聽りて  
昂發笑ひて此豈婦人女子の能くする所かむ

忠興の  
夫人の  
父の名  
何如

やと言へど雍氏を不きうびりて然らば吾君も  
先づちて死ぬむと言ひて少くも屈する色あり  
明日城果して落つらむとて雍氏夫と共に縊  
て死しつらむとぞ

○第三十二課

越中守細川忠興の夫人の明智光秀の女なり光  
秀弑逆の罪人となりて以て一度離別せらるる  
豊臣氏の命によりて復歸す事を得る大坂の邸  
に居たり石田三成密に謀を上杉景勝に通ず  
兵と陸奥國を起さしむるに及て忠興も諸將と

與ふ徳川氏に從て東に  
下りけしと三成事と西  
に擧げんとし思へら  
く諸將の妻子を城中に  
取入せり質とせば必心  
を翻して徳川氏を負く  
者多しと先使者を  
忠興の邸に遣はせ世の  
中物騒がしく候へば疾  
く城中に來らるべしと



小説讀本卷四

三十三

大坂の邸

言ひ送りぬ夫人忠興出陣の留守ありてハ唯此儘  
 居候えんと辭しけども三成聽りて之を使  
 者再三ホ及べり夫人ハ老臣等と召く汝等知を  
 る如く殿の出陣賜ふ時能く此邸と守りてよ  
 と仰せ置りて之をいりて他人の召しホ應  
 ぶべき若強ひて城中ホ取ハまんとなくハ潔く  
 自殺せんとして縱令何如ある罪と蒙るとも此處  
 へバ立去るまどと答へけむハ三成大ニ怒り兵  
 士三百人へ遣りて捕へ來らしめんとて夫人ハ  
 邸内の老少とハ悉逃去らしめ門と鎖して待居

夫人の  
 死する  
 時  
 論  
 何如  
 語

たりよ三成の兵來り攻むる事急ありり此ハ十  
 歳なる男兒と八歳ある女子とと膝近く召ひ頭  
 と撫で御身等ハ稚くとも武將の家ニ生さる  
 之ハ善く聞賜へ死すべき時ホ死せされハ死ハ  
 勝る恥有ると言へり今こそ死すべき時なると  
 て二人とも刺殺し其身も自害しり是より三  
 成諸將の妻子と質を取ることと思ひ止まりぬ  
 是全く此夫人の節義又因りてなり

○第三十三課

應神天皇の御子ホ大鷲鷯尊菟道稚郎子皇子と

稚郎子  
皇位  
御譲  
以玉

御兄弟かちしませり御弟菟道稚郎子皇子の  
先に皇太子と立ち賜へるに天皇崩御一賜ひて  
後御位と大鷦鷯尊又譲る玉ひて天下に君とし  
て萬民以統御する事ハ徳を以て稱ふべし  
を我ハ弟なるが上ハ徳寡しいりて天業を嗣が  
む御兄ハ仁孝感すべく御齡も長ト賜へハ誠不  
天下の君とまじきを以足らり先帝の我と立て  
る太子と爲賜へるハ唯愛と以ての事也兄ハ上  
ふして弟ハ下なる事ハ古今の典あり願くハ御  
兄天位と嗣き玉へとのたまふるに大鷦鷯尊固

大鷦鷯  
尊の  
御譲  
以玉

辭み賜ひく我ハ賢なり  
りと雖も豈先帝の命と  
まじき弟王の願不從を  
ひやして兼け賜ふ如  
此互に譲らせ賜ふ間ハ  
既に三年と經たりけ也  
ハ皇太子御兄の御志の  
奪ふ可らざる事と知  
ろしめしいつまで生き  
て天下と煩さんやと詔



母の妻の祥  
の妻の祥  
の妻の祥  
の妻の祥

たすひて自盡したるを大鷦鷯尊驚きて慟哭  
し、事限あけれどせむ方無くて即ち難波  
高津宮より天位に即りせ賜へり

第三十四課

支那に晋の代に王祥王覽と云ふ兄弟あり、  
覽の母は祥の繼母なり、母覽のみを愛し  
て屢無道と以て祥を苦しむるに覽は兄の事ふ  
ること少くも怠らぬ母の一時として祥と答る  
つゝと有るに覽必泣きて諫むる故に母の無道  
も少く止む事有りけり其祥と苦使する毎小

母の妻の祥  
の妻の祥  
の妻の祥  
の妻の祥

は覽必兄と共に使をせしむるに非理と以て祥の妻  
と使ふ時の覽の妻も往きて同トくある故に母  
せむ方なくして使ふ事と止めり後祥が譽高く  
ありたりと母疾みて暗りに毒酒を飲せて殺さ  
むと一とと覽察して其酒を取らむと為ると  
祥は與へざるに覽強ひて奪ひてこきと  
ち反せり、後覽は母の祥と毒殺せむ事  
と恐きて母より祥は食を與ふを必す嘗め  
驗みたり、故母も毒殺する事と得ざるに  
らく兄弟互に孝行友愛の心深きに有りて其名

各顯きて祥の太保に進み覽の後小光祿大夫に  
成りたり兄の弟と愛し弟の兄と敬をる人の  
倫也祥兄弟の行ひ實に世に模範と謂ふべし

○第三十五課

兄弟の同胞として其親しき事他人の比小非され  
ば其憂に見ては互に救ふべきの固より也さ  
ば稚きものといへどもよく心と着けむある  
べりらば佛蘭西よりルウシイロームと云ふ女子  
あり容色美麗ふて清けなまども麗服と着る  
者なりが流民なりとて裁判所に送らるる其

ルウシイの  
裁判所の  
送らるる  
以て如何  
如呼ぶ

時ルウシイ我の父母に後述て朋友もなす只一  
人の弟あれども未弱年おれは我が生業を助く  
可き程の事と爲出た事も能く故に流離して  
小至まる也裁判役の曰く汝の家あき者小て  
市街に於て乞食をれば流民不異る事無しとて  
折檻院に送らんとするに折節側より一人の小  
童勇しげある顔色ふて出來り我此處に在り我  
が姉憂ふる事勿まと言ひて裁判役の前に立て  
て裁判役の者之を見て汝は誰ぞと問へば我の  
此處なる小女の弟ジャームスロームと云ふの

シヤ  
ムス  
ハス  
ヒ  
事何如

をりと答ふ又年ハ幾許ぞと問へバ十三歳也といふ汝何の用有る此處に來るぞと問へバ他事に非む我今姉と供給を乞ふ道を得る故取り返さんが為來たる也と云ふ裁判役の者然らバ汝姉の爲に刻苦せよ去れど汝の姉は流離せる所由とハ辨解せざる有るべらと諭せば我母固より病み有りしが十四五日前の嚴寒堪へ兼ね終に歿し故に困難の餘と思ひ立ちて職人と成り姉と扶助せむと思ひて刷工の許は行き々弟子となりてより毎日

晝ハ我が食の半と遺て夜ハ我が臥床と寢させて供給をかきたせども姉ハかゝ食物の不足なる故にや市街に出で乞食する故に邏卒に捕へられたる也我是に於て更なる善き業を尋ねたるに我と養ひて一月小二十フラングの錢と





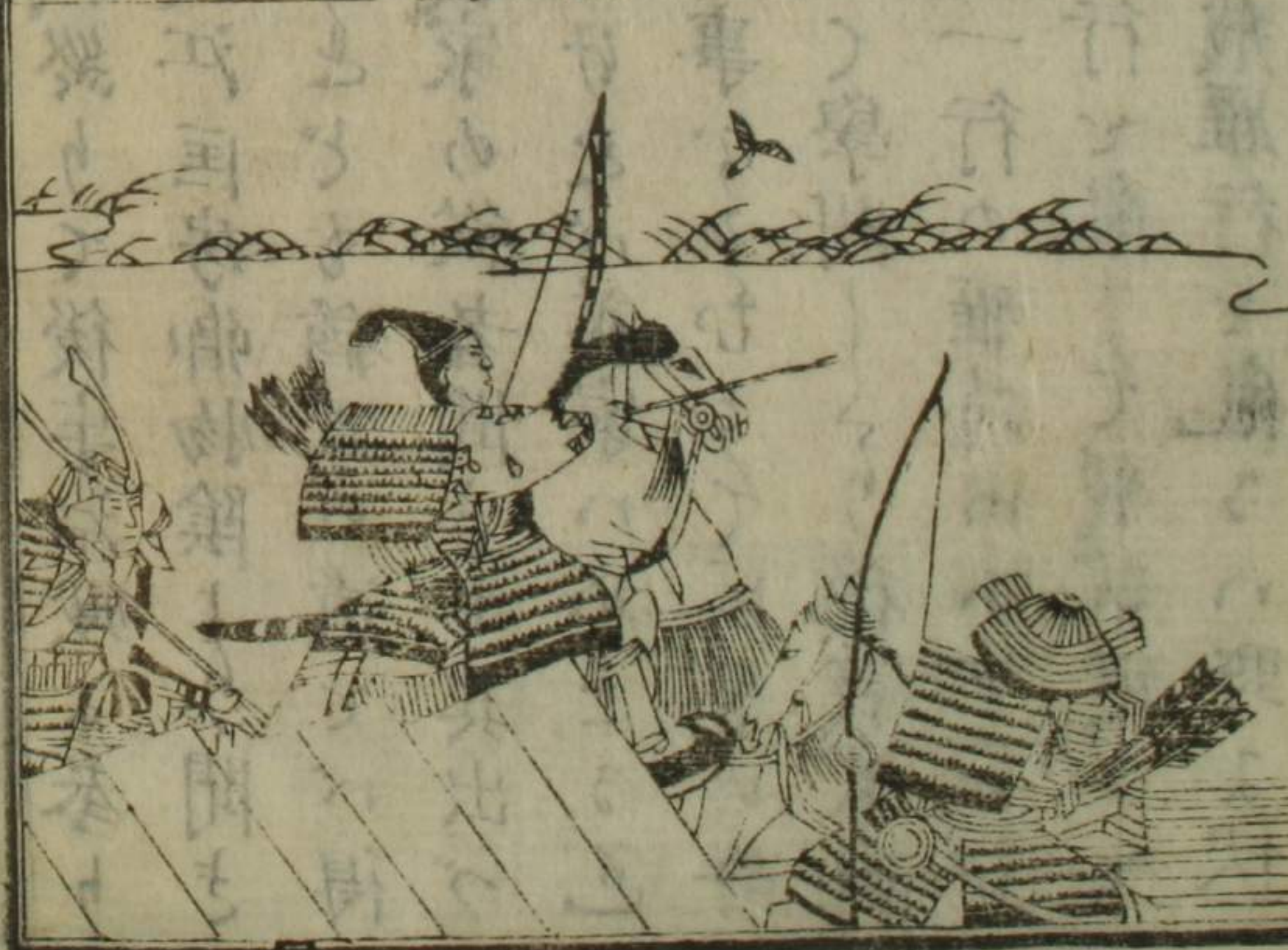
與ふる所を得ざる故に此二十フランダの錢を以て姉を扶助せむとあるなりと言へども此時まで猶姉と處を隔てれきたりしはシヤームス、ロームまこと裁判役に向ひて我の姉の側を往らむと思ふと何故に近づく事と許し賜えぬぞといふも裁判役此友愛の心の厚きに感してルウシイと赦したりしは互に抱持して涙を流せりとぞ兄弟の情は何國をてもうゝるものを知るべし

第二十六課

義家の學問の志は如何なる

源義家陸奥國數年の戰終りて後宇治殿に参りて戰の物語をけりしに大江匡房卿物陰より聞きておもむき才有る武者などとも猶軍の道とて得知らざると獨言せしと義家の從者聞きて其出づるともちて云々と語りけしに義家の怒る色も無く定めてより有る事なむとて匡房の許より直に弟子に成りて學問しつゝ後義家出羽の國金澤の城攻の時一行の雁蒔田に下らむと爲たりしが俄に驚きて行を亂して飛び返ると見て先年匡房卿の教を飛雁行と亂るの野は伏

兵ある也と言ふをたふさ  
 事有て此野不必敵の伏  
 兵有る可くして四面よ  
 こ搜がさるに果して  
 敵三百餘騎隠れてあり  
 たるて見出た大捷を得  
 たり此時義家學の益有  
 る事と知ると吾先に匡  
 房卿の教を受けざる殆  
 危りりなむといつる義



義家の  
 難を免  
 とどう  
 如以何

家已て屈して問ふことと耻ぢざる故に如是危  
 難を免りたはる誰ふても學問無くては有る  
 べりざる事此を以て知る可きなり

○第三十七課

支那の魏の李謚をトめ四門小學博士孔璠を師  
 事して學問倦む事無く勉勵して止まざるは  
 ば所有經史百家の書盡く歴覽して年末三十な  
 らざるに其師璠よりも學業をるるに超えり是  
 の後より璠がへて謚につきて業を請ひたり  
 功を積む事又しくして怠らざる時其師は超

古人の  
勝らん  
ともし  
工と何  
如

ゆるも難りらむ凡て平  
常行事讀書の時又當り  
て先其事を行ひ  
人其書と著し九人よ  
りも一層上不出でむの  
志と起し何事とも苟  
且ならざるやう思と潛  
めて考ふべし古昔の大  
才有りて未曾有の發明  
となし人とも雖も生



古昔の  
六發明  
と  
の  
工  
夫  
何  
如

れぬがらわしと然るに非をよく小と積み微と  
重ねて後又成し得たる者なきは聊も物に倦む  
心無しと日々月々に進歩せし事と思ふべし

北爪有卿 画

明治十四年十月廿二日 翻刻御届

翻刻人

東京府平民

山中市兵衛

芝區三島町十番地



